万葉集　巻３　三二〇　高橋虫麻呂

不尽(ふじ)の嶺に降り置く雪は六月(みなつき)の十五日(もち)に消(け)ぬればその夜降りけり

【現代語訳】

富士に積もっていた雪は六月十五日に消えて、消えたと思ったその夜、また降り出した。

山部赤人の歌に続く、三一九、三二〇、三二一は、高橋虫麻呂の歌だと考えられています。そのうちの三二〇番歌は、一年を通して富士山には雪があるという歌意で、旧暦の酷暑の日に雪が消え、その夜からまた雪が降り出すという伝説に拠っています。

写真：田子の浦港の山部赤人歌碑と富士山

万葉集　巻１１　二六九五、二六九七　作者未詳

我妹子(わぎもこ)に逢ふよしをなみ駿河なる富士の高嶺の燃えつつかあらむ

妹(いも)が名も我が名も立たば惜しみこそ富士の高嶺の燃えつつわたれ

【現代語訳】

いとしいあの人に逢う手段がなくて、あの駿河国の富士の高嶺のように、私の心は燃え続けるのであろうか。

あの子の名も私の名も、噂に立ったら惜しいからこそ、あの富士の高嶺のように、思いは燃え続けている。

万葉集巻 11 にある、作者未詳の富士山二首（或歌(あるうた)を含め三首）です。富士山の噴火を、燃えるような恋に例えています。富士山の噴火を伝える歴史書の記録としては、『続(しょく)日本紀』の７８１年が最も古く、奈良時代には活発に活動していたようです。

『日本紀略』は、８００年の噴火の様子を、駿河国が報告したと記しています。この噴火にともなう「焼砕石」が足柄路をふさいだため、箱根路が開設されました。

富士山の噴火、富士山の火は、心の中で燃え上がる恋のたとえでしたが、『古今和歌集』の時代になると、富士山の煙が成就しない恋を表すようになっていきます。

絵：大森明恍「朝焼け富士」